

ソニー、キヤノン、パナソニックがそるい踏みした「InterBEE2021」

神谷 直亮

57回を迎えた「InterBEE2021」（主催：電子情報技術産業協会）が、11月17日から19日までの3日間、千葉市の幕張メッセで開催された。「コンテンツをつくる（制作）、おくる（伝送）、うける（体験）」をテーマに掲げて2年ぶりのリアル開催となった会場には495社・団体が出展し、主催者の発表によれば18,308人の来場者でにぎわった。中でもソニー、キヤノン、パナソニック、NHK/JEITA（電子情報技術産業協会）が大きなブースを構えて来場者の関心と呼んでいた。本イベントについては、すでに本誌12月号で詳細なレポートがなされているが、本稿では筆者なりに見たり聞いたりした内容をまとめてみた。

ソニーは、スーパー35mm 4K CMOS イメージセンサー搭載のマルチフォーマットポータブルカメラシステム「HDC-F5500」を出展して注目を集めた。グローバルシャッター技術を採用しているため、「スポーツやライブイベントの4K UHD撮影に最適」という。ネットワーク機能に関しては、「IP、リモートマルチカメラオペレーションなどに対応している」と語っていた。

デジタル一眼レフカメラ「α（アルファ）」のコーナーでは、意表を突く同シリーズのカメラを積載して飛ばせるドローン「Airpeak S1」を出展し、来場者の関心と呼んでいた。独自開発のドローンで「最高速度90km/h、耐風性能最大20m/s、ステレオカメラ搭載、GNSSをベースにし

た安定飛行が可能」とのことであった。

制作面での新商品としては、ライブ制作にも使えるクラウド中継システム「M2 Live」の展示・デモを行って「汎用性の高いIP化、クラウド化が可能になった」ことを実証していた。注目の「InterBEE IPパビリオン」では、同社が製作した「ST2110ベースIP中継車」を披露して、ライブデモを実施するという力の入れようであった。

キヤノンのブースでは、「EOS C70」「EOS R3」カメラが目についた。「さらなる機動性を手に入れた新概念モデル」を謳った「EOS C70」は、「4Kスーパー35mm Dual Gain Output センサーを搭載し、最大で16 + Stopsのダイナミックレンジを実現。RFレンズマウントを採用している」という。フルサイズミラーレスカメラ「EOS R3」については、「EOS初となる自社開発裏面照射積層35mm CMOS センサーを搭載、映像エンジンにはDIGIC Xを採用している。解像度は、約2410万画素。ネットワーク機能は、5G端末との連携により5G回線を使用した画像伝送を実現する。Wi-Fi通信は、2.4GHz/5GHz帯デュアルバンドに対応している」と説明していた。

パナソニックのブースでは、低価格エントリーモデルからプロフェッショナルモデルまで9種を並べたリモートカメラシステムのラインナップが見事であった。中で

も「リアリティショーやイベント向けのモデル」という4K新製品「AW-UE80W/K」型インテグレートドカメラは、広角74.1度×電動光学24倍ズームを搭載しており、限られたスペースから全体を広く映すことができる。配信については、「低遅延でIP伝送できるHigh Bandwidth NDI、限られた帯域幅でも効率よく伝送できるNDI/HXを搭載しており、安定した配信を実現する」と述べていた。

制作分野では、「KAIROS」オンプレミスとクラウドサービスを活用するリモートソリューションの実演に余念がなかった。

「KAIROSクラウドサービス」については、「撮影から配信までワークフローの全体を対象にしたトータルサービスで、2022年春から開始する予定」と語っていた。

NHK/JEITAは、「つながる、つなげる～あなたと紡ぐ！メディアの新時代へ～」をコンセプトに掲げて、「4K8Kコンテンツ」と「未来のメディア」のPRに力を入れていた。

「4K8Kコンテンツ」の目玉は、NHKと東京国立博物館が共同で取り組んだ「8K文化財プロジェクト」で、来場者に3Dスキャンした高解像度文化財を自由なアングルで切り出して見る体験を促していた。操作には、ゲームコントローラーが使用されておりユニークな発想と思われた。今回披露された文化財は、法隆寺の金色の秘仏「救世観音菩薩立像」と、重要文化財「遮光器



写真1 ソニーは、マルチフォーマットポータブルカメラ「HDC-F5500」を出展して注目を浴びた。



写真2 ソニーは、「α」シリーズのカメラが搭載可能なドローンを披露して意表を突いた。



写真3 キヤノンのブースでは、「EOS C70」「EOS R3」カメラが関心と呼んでいた。



写真4 パナソニックは、低価格エントリーモデルからプロフェッショナルモデルまで9種のリモートカメラシステムを紹介した。



写真5 エーティコミュニケーションズは、超小型平面アンテナ「Satcube」、「Sat-Q VSAT サービス」、2台の衛星中継車などを出展して孤軍奮闘していた。



写真6 三友は、12K 360度、3D VRカメラ「KANDAO Obsidian Pro」を熱心に売り込んでいた。

土偶」である。この他、「8K中継トライアル」「IPリモートプロダクション」のコーナーも用意されており、「8K中継トライアル」では、カーブパブリックビューイングの映像を公開した。「IPリモートプロダクション」は、「広島平和記念式典」のIP生中継であった。

「未来のメディア」のコーナーでは、AR(拡張現実)、VR(仮想現実)技術を活用した「空間共有コンテンツ視聴システム」が2種類紹介された。1種は「AR技術を活用した番組への没入体験」で、もう1種は「没入型VRディスプレイ」である。「ARによる没入体験」では、タブレットを用いた自由視点AR映像とオブジェクトベースの音響を楽しみながら番組の世界を自由に歩き回る体験を実現していた。このコーナーでは、小型Octaマイク「Cardioid」のデモも行われ関心を呼んだ。

今回の「InterBEE2021」で、筆者にとって見逃せないブースが2つあった。1つは、エーティコミュニケーションズで、もう一つは三友のブースである。

衛星映像伝送を得意とするエーティコミュニケーションズは、超小型平面アンテナ「Satcube」と2台の衛星中継車を前面に押し出して出展した。

スカパーJSATの定額制IP伝送サービス「Sat-Q」に対応する「Satcube」については、応援に駆け付けたスカパーJSATの関係者がビデオでユースケースを紹介しながら商談にも応じていた。今回ビデオで紹介されたユースケースの1件は、「岩手県三陸からの地域プロモーションで、銀座にある岩手県のアンテナショップでの産地直売イベント向けに衛星でライブ中継し

た」という。ドローンを使って撮影した産地の生き生きとした画像も再生されており新鮮であった。もう1件は、三重県の奥まった山間にあり、モバイル回線が脆弱なゴルフ場で開催されたトーナメント関連のインターネット中継であった。「Satcube」アンテナは非常に軽量なので、他の制作機材と一緒に軽バンに搭載して現場に持ち込むことができるのがメリットと言える。「Satcube」を使うスカパーJSATの「Sat-Q」サービスは、「サットと使える！IP伝送サービス」を旗印に掲げて売込みが行われており人気を得ているようだ。

なお、「Satcube」アンテナは、すでによく知られるようになってきているが、ノートPCサイズで重量わずか8kgと超軽量に仕上がっている。使い方については、据え置きタイプ、三脚に取り付けるタイプ、車のルーフに設置するタイプ、車のボンネットに置くタイプの4種が提唱されていた。三脚に取り付けるタイプの狙いについては、「人込みの中でSatcubeアンテナを使用する場合に、周囲の障害を避けて衛星にアクセスする高さを確保できる」と言う。車のルーフに設置するタイプには、据え付け用に強力なマグネットが使われていた。車のボンネットに置くタイプに関しては、「設置場所が傷付かないように吸盤を使用している」との説明であった。

2台の衛星中継車の1台は、ローコストでハイパフォーマンスを誇る「ハイエースSNGパック」で、車上には直径1.2mの「SWE-DISH DA120」アンテナが設置されていた。この車載局の特色としては、走行中でも使える8KVA発電機の搭載、油圧式伸縮ポールの装備、5名が向き合って会議に使える運用室の確保が挙げられる。も

う1台のエルグランドベースのエコ衛星中継車には、Cobham社製の1mアンテナを搭載して出展した。インマルサットGXとの送受信を実現できるのが特色である。

ブースの担当者は、上述した種々の展示以外に「エーティコミュニケーション独自のインマルサット・グローバル・エクスプレス・サービスを始めた」と語っていた。

衛星通信には、同社が販売している低価格の「Cobham社のアンテナが最適」とPRに余念がなかった。

三友は、中国のKANDAO Technology社が開発した最新のハイエンド12K 360度、3D VRカメラ「KANDAO Obsidian Pro」と8K VRライブ配信カメラ「QooCam 8K Enterprise」を目玉にして出展した。

「KANDAO Obsidian Pro」は、8個の2400万画素のAPS-Cセンサーを備えた世界初のシネマティック3D VRカメラで、12K x 12K 30fpsの3Dパノラマビデオに対応している。価格を聞いてみたら、「すでに6月から販売を開始しており約270万円」とのことであった。9月に発売を開始した「QooCam 8K Enterprise」は、5G通信回線による配信を想定して開発した製品という。

三友のブースでは、これらの他に最高峰シネマレンズを謳った「Leitz」やSkyworth社のVRヘッドセットも出展されており来場者の注目を集めていた。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト